地域防犯パトロールによる通学見守り活動

安全・安心なまちづくり

セーフコミュニティ再認証に向けて

十和田市は、平成21年度に日本国内では2番目に、世界保健機関（WHO）セーフコミュニティ協働センターが提唱するセーフコミュニティの国際認証を受けました。それから5年。今年度、認証の更新時期を迎え、再認証を目指しています。

けがは予防できる

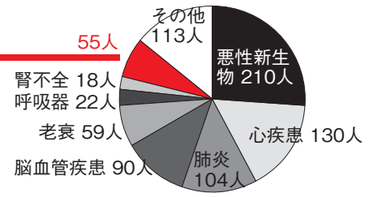
WHOは「すべての人々が可能な最高の健康水準に到達すること」を目的に掲げています。健康を阻害する大きなものは「病気」と「けが」です。「病気」は保健行政や医療により対策の努力が続けられていますが、一方の「けが」はどうでしょうか。

事故などのニュースを聞いても何となく危険を感じるままにしていたり、家庭内の転倒などは実態が見えにくい状況にあったり、市民一人一人が十分に対策を講じるまでには至っていません。

こうしたことから「けがや事故などは偶然の結果ではなく、的確な分析と対策で予防することができる」という考えに基づいて、行政や地域の皆さんとが一体となって進める安全対策がセーフコミュニティの取り組みです。

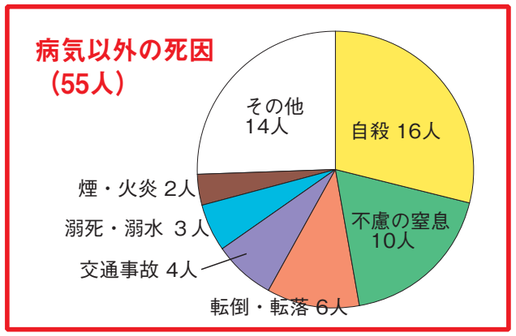
セーフコミュニティは、特別な活動を新たに始めるのではなく、これまでの地域活動や行政機関の取り組みを生かしながら効果的な「予防」を目指して、工夫を加えたり、連携を強めていく活動です。

平成24年十和田市の人口動態統計からみる死因（801人）



平成24年中の死者801人のうち55人が病気以外の死因でした。

セーフコミュニティは主にこの分野の安全対策に取り組むものです。



厚生労働省「人口動態統計」をもとに、まちづくり支援課まとめ

データを集め分析する

統計では、1日当たり5人の市民が事故やけがに遭っています。症状が重いと治りにくく、寝たきりになってしまうこともあります。市内で発生したけがや事故の情報は、組織の違いや、情報管理などの事情によって、各機関ごとの保有にとどまっていました。

しかし、セーフコミュニティの認証を受けた市は、取り組みに賛同する県をはじめ、多くの団体や組織との連携と協働により、外傷などのデータ収集の仕組みを構築。データがない分野があると、アンケートをとるなどして実態に迫ります。

収集されたデータは、医療などの専門家で組織する外傷サーベイランス懇談会と、対策を実施していくセーフコミュニティ推進組織が多岐にわたり分析し、暮らしに潜む危険性を明らかにしていきます。これによって得られた結果は、地域集会などで説明するなど、市民との共有に努めています。

データを収集・分析し、対策に生かす行動が、セーフコミュニティ活動の基盤です。予防対策は、収集したデータの分析による正しい認識から始まります。

安全・安心の向上へ！

課題の共有

セーフコミュニティ推進組織の構成員である各団体からのメンバーが課題を持ち帰ります

セーフコミュニティ推進組織

推進懇談会　検討委員会　８つの領域別対策部会　外傷サーベイランス懇談会

（分析の一例）　データによる外傷の特徴

重症度	乳幼児	就学児	青壮年	高齢者
死亡			男性の自殺者が多い	
				窒息による男性の死亡が多い
重症・中等症（入院）				自宅内での転倒が多い
軽傷	自宅内でのけがが多い	スポーツ中のけがが多い	自動車によるけがが多い	３割が骨折し、入院している
不安	住宅用火災警報器の設置率が低い 暴力・虐待に関連する相談がある			
				単身世帯の増加

分析

重症度と年代層に当てはめると、男性の自殺者と高齢者の窒息が多いことが大きな課題であることが分かります。

データ収集

各機関で持っている統計やアンケート

市内全域で発生する事故・けがによる外傷事例